

中等教育における英文法指導のあり方 —「英文法教育研究Ⅰ・Ⅱ」における試み—

大 屋 進

岐阜聖徳学園大学外国語学部非常勤講師

How to teach English grammar to secondary school students: Course contents of English Grammar Instruction I and II

Susumu OYA

キーワード：教職課程 中等教育 英文法指導 学習指導要領（外国語） Oral Introduction

I. はじめに

平成20年改訂の中学校学習指導要領(外国語)¹⁾は、「言語材料の取り扱い」の中で特に文法について言及し、「イ 文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連づけて指導すること。」としている。これは平成10年改訂²⁾の際には記されておらず、日本の英語教育における文法指導のあり方が課題であるとの認識によるものと考えられる。実際、「言語材料の取り扱い」のウでは「……文法事項の取り扱いについては、用語や用法の区別などの指導が中心とならないように配慮し、実際に活用できるように指導すること。」と述べており、授業で明示的な文法用語の解説や用法の区別に焦点が当てられ、文法を活用したコミュニケーションが十分行われていない実態を示している。同様の記述が高等学校学習指導要領(平成21年)にもある。また、平成29年の改訂では、文法の知識とコミュニケーションについての関連が「目標」「内容」「指導計画の作成と内容の取り扱い」において記されており、文法指導改善の必要性を強く訴えていると考えられる。

「中学校学習指導要領解説 外国語編」(平成20年)³⁾では、「文法事項を指導する際には、その意味や機能を十分に理解させた上で、それまでに学んだ語彙や文法事項と関連を図り、言語活動の中で自分の考えや気持ち、事実などを伝え合うことに生かすことが大切である。」としている。(下線 本研究者)

本学外国語学部の教職課程では「中等教科教育法Ⅰ(英語)」「中等教科教育法Ⅱ(英語)」「英文法教育研究Ⅰ又はⅡ」「第二言語習得論Ⅰ又はⅡ」の4科目が、中学・高校の外国語(英語)免許取得に必須となっている。昨年度から「英文法教育研究Ⅰ・Ⅱ」を新たに開講したが、それは英文法指導の力量を高めるとともに、教育実習前に実際に教える経験をさせるためである。文部科学省が求めているように文法を「実際に活用できるように指導する」方法を学ぶのは、選択履修の「中等教科教育法Ⅲ(英語)」においてであり、「英文法教育研究Ⅰ・Ⅱ」では、英文法の導入の仕方、つまり中学・高校の文法事項の形式と「意味や機能」をどのように生徒に理解させるかについての方法を学ぶ。新出の文法事項を明示的な説明に終始せず、英語を用いて理解させるための方法や工夫を模擬授業を通して構築したい。以下に本学外国語学部における「英文法教育研究Ⅰ・Ⅱ」の実践内容を示し、課題について検討したい。

II. 「英文法教育研究Ⅰ」

1. 科目の概要

本研究者の勤務校教職課程の2年生が外国語(英語)の教員免許取得に向けて履修するのは、「中等教科教育法Ⅰ(英語)」「中等教科教育法Ⅱ(英語)」であり、「英文法教育研究Ⅰ」「英文法教育研究Ⅱ」については少なくともいずれかを履修することとなっている。「英文法教育研究Ⅰ」は、中学校で扱う文法事項をどのように教えるかを学び、実践する科目である。実際に受講生の一人一人が「教師」として教壇に立ち、「中学生」役の学生に新出文法事項の導入・説明をする。中学校における英文法の指導の

仕方を学び、実際に教える経験をさせることがこの科目の主な目的である。

昨年度開講した科目で、例年前期に行っており、教材としては、金谷 憲（編著）（2012）「くわしい英文法 中学1～3年」文英堂と投野由紀夫（編）（2015）「クラウン チャンクで英単語 Standard」三省堂の2つを用いている。以下は授業内容、評価方法である。

2. 授業内容

(1) 全体の授業計画

第1回目の授業では、文法事項の導入方法を教えるとともに、それを補完する明示的な説明の仕方について学生に示している。第2回目から文法指導に限定した指導案の作成及び発表練習をペアで行わせており、全体で15回の授業のうち、後半では各受講生が教壇に立ってOral introductionと補足説明のみの模擬授業（Micro-teaching）を行うことにしている。また、受講生の基本的な語彙力の確認及び増強のため、授業の初めに毎回小テストも行っている。

以下は各授業の内容であるが、「」内は今年度扱った文法項目を示している。

- 1回 オリエンテーション、Oral introduction・補足説明の仕方、「be 動詞の過去形」
- 2回 練習①「一般動詞の過去形」
- 3回 練習②「can」
- 4回 練習③「進行形」
- 5回 練習④「be going to」
- 6回 練習⑤「must, have to」
- 7回 まとめ、確認試験
- 8回 模擬授業①「比較級」
- 9回 模擬授業②「受動態」
- 10回 模擬授業③「現在完了（継続）」
- 11回 模擬授業④「現在完了（経験）」
- 12回 模擬授業⑤「現在分詞」、説明1（口頭ドリルの仕方）
- 13回 模擬授業⑥「関係代名詞（who）」、説明2・練習（口頭ドリルの指導案作成）
- 14回 説明3・練習（コミュニケーション活動の指導案作成）
- 15回 まとめ、確認試験

(2) Oral introduction と補足説明

文法事項はOral introductionの手法を用い口頭で導入させることにしており、中高生が未習の文法事項を耳で聞いて、その形式・意味・機能に「気づかせる」⁴⁾ことを目的としている。受講生がOral introductionの原稿（指導案の細案の部分）を作成する際の留意事項としては、次の4点⁵⁾を示している。①既習の易しい英語を用いて、口頭で新出の文法事項を導入する。②設定した場面などを用いる。③ばらばらの場面設定をするのではなく、提示する4～5例の場面が、できるだけ自然な流れで繋がるようにする。④中学生に問いかけ、interactしながら行う。

導入は全て英語で行う⁶⁾ので、個々の中学生により理解の程度が異なると考えられるため、Oral introductionの後、日本語で明示的な補足説明を行い、生徒が耳で聞いた文法事項の形式・意味・機能についての「気づき」を確かなものにさせている。

(3) 学生の発表例(Micro-teaching による模擬授業)

学生A：「比較級」（英語は原文のまま）平成29年6月8日実施

T: Look at this picture. They are my friends Jane and Catherine. Jane's height is 150 cm and Catherine's height is 160 cm, so Catherine is taller than Jane. Catherine is taller than Jane. Repeat after me. Catherine is taller than Jane.

Ss: Catherine is taller than Jane.

T: OK, next. Do you know this animal S1?

S1: Yes, I do.

T: What is the name of this animal S1?

S1: This animal is elephant.

T: Yes, This is a elephant. Then what is this animal S2?

S2: This animal is rabbit.

T: Yes, this is a rabbit. Which do you think is big S3?

S3: I think a elephant.

T: OK. A elephant is bigger than a rabbit. A elephant is bigger than a rabbit. Repeat after me.
A elephant is bigger than a rabbit.

Ss: An elephant is bigger than a rabbit.

T: Good! Next..... (以下略)

比較的良くできた発表例であるが、若干の課題も指摘できる。比較級の例を1つ示しただけの時点でクラス全体に repeat させているが、2~3の例を示し、中学生の「気づき」が深まってからのほうが望ましいと考えられる。また、身体的特徴を授業で取り上げるのは避けたいところであるが、架空の人物の身長を比較していることでその弊害はある程度和らげられている。教室内の生徒の身長・体重などを比較することは、からかいやいじめにつながることもあり、慎まなければならない。英語については、誤りは少ない方であるが、冠詞の使い方が不正確である。

3. 評価方法

評価は次のように行った。①授業への取り組みを10%とし、②発表(模擬授業)が30%、③小テストが20%、④2回の確認試験は40%とした。確認試験ではテキストの文法事項や語彙について出題し、語彙の確認と中学の文法事項の徹底を図った。

また、②の「発表(模擬授業)」の評価については、「授業の基本」「授業内容」の2観点で行うこととし、「授業の基本」では授業を行う際に英語教師が常に留意すべき6つの項目を5段階で評価した。「声量が適切か」「生徒と eye contact をとっているか」「明確な指示をしているか」「板書が計画的で、チョークの使い方が適切か」「英語は正確で流暢か」「わかりやすいか」の6点である。「授業内容」の観点では、具体的に良い点・改善すべき点を記述した。各模擬授業の後には、本研究者がこの評価表に基づいて講評した。

Ⅲ. 「英文法教育研究Ⅱ」

1. 科目の概要

「英文法教育研究Ⅰ」と同様に教職課程の2年生が後期に選択履修する科目で、「英文法教育研究Ⅰ」か「英文法教育研究Ⅱ」のいずれかが必履修となっている。「英文法教育研究Ⅱ」では、高校の文法事項を扱う。言語材料が高校という点だけが異なるが、基本的な内容は「英文法教育研究Ⅰ」と同じで、受講生が教師として英文法をどのように教えるかを体験・習熟することが主眼である。教材は、早瀬尚子(編)(2013)「理解しやすい高校英語 コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ」文英堂と松野由紀夫(編)(2015)「クラウン チャンクで英単語 Standard」三省堂を用いている。以下は授業内容と評価方法である。

2. 授業内容

(1) 全体の授業計画

授業の進め方は「英文法教育研究Ⅰ」と基本的に同じである。しかしながら、中高1時間の授業における Oral introduction と補足説明の位置づけが理解されにくいことが判明したので、典型的な「1時間の授業の流れ(文法指導中心の場合)」を第1回目の授業に示すことにし、Oral introduction や補足説明の位置づけを行った。

また、第1回目の授業では文法事項の導入方法及び日本語による補足的な説明の仕方も教え、第2回目からは各受講生の指導案作成練習・発表練習を4週にわたって行った。比較的取り組みやすい文法事項を選びペアで練習させた後、毎回数人の学生を教壇に立たせた。後半の授業計画では、受講生一人一人が Oral introduction と補足説明だけの模擬授業(Micro-teaching)を行った。

以下は全体の授業計画である。

- 1回 オリエンテーション、典型的な1時間の授業の流れ（文法指導中心の場合）、Oral introduction・補足説明の仕方
- 2回 指導案作成及び模擬授業の仕方、各受講生の発表日・担当文法項目決定
- 3回 練習①「There is 構文」
- 4回 練習②「助動詞」
- 5回 練習③「比較級」
- 6回 練習④「現在完了（完了・結果）」
- 7回 まとめ、確認テスト
- 8回 模擬授業①「分詞（過去分詞）」
- 9回 模擬授業②「最上級」
- 10回 模擬授業③「受動態」「不定詞（形容詞的）」
- 11回 模擬授業④「ask/want+A+to～」 「動名詞」
- 12回 模擬授業⑤「現在分詞」「関係代名詞（which）」
- 13回 模擬授業⑥「現在完了（経験・継続）」
- 14回 模擬授業⑦「関係代名詞（who）」 「仮定法過去」
- 15回 まとめ、確認テスト

(2) 指導案作成上の留意事項

指導案は略案ではなく細案とし、1時間全体の授業計画ではなく、Oral introduction と補足説明の部分だけに限定した。作成上の留意事項として徹底したのは、①教師の発言(英語)、板書事項を全て記すこと②予想される中学生の発言も全て記すことである。また、Oral introduction では「英文法教育研究Ⅰ」と同様に次の4点を学生に求めた。①既習の易しい英語を用いて、口頭で新出の文法事項を導入する。②設定した場面などを用いる。③ばらばらの場面設定をするのではなく、提示する4～5例の場面が、できるだけ自然な流れでつながるようにする。④高校生に問いかけ、interact しながら行う。

指導案は模擬授業発表の1週間前を提出期限とした。当日提出では、ぎりぎりまで指導案作成に追われ、授業の発表練習が疎かになってしまい、拙い授業展開になる場合があるからである。

(3) 学生の発表例

①学生 B 「ask/want + A+ to～」：興味・関心を喚起することに焦点を当てた例（英文は原文のまま）

平成28年12月15日実施

T: Do you know this animation?

Ss: Yes/No.

T: This is Doraemon. Let's see some pictures. Nobita talks with his mother.

Mother: Wow! Potato is low priced today. I want to buy some potatoes but I'm busy. Please buy some potatoes.

Nobita: OK.

T: She asked him to go to buy some potatoes.

T: Nobita meets Gian on his way to buy potatoes.

Gian: Come on Nobita. You must play baseball.

Nobita: OK.

T: Gian told Nobita to play baseball. He (Gian) always gives advice about doing the best to his teammates. He always advises them to do the best. Nobita is boring this time. Doraemon is running toward him after a while.

Doraemon: Your mother is angry because you are late home.

Nobita: I forgot to buy potatoes. Would you go to buy potatoes?

T: He wants Doraemon to go to buy potatoes.

この生徒の場合は、高校生の興味・関心を喚起したいとの思いから、高校生などになじみの深い「ドラえもん」というアニメの登場人物を用いている。そのことは評価できるが、下記に示す受講生同士の

相互評価に見られるように、教師が一方的に話すだけで高校生役の大学生との英語によるやり取りが全くなく、「高校生」がぼんやりと聞き流しているだけなのが最も大きな課題である。⁷⁾ また、Oral introduction の焦点がはっきりせず、生徒が新出文法事項の形式・意味・機能に「気づく」ことは困難であると考えられる。英語も耳で聞いて理解できるくらいの易しいものにすべきで、誤りもいくつか見られる。

模擬授業後は、毎回受講生全員に相互評価を行わせているが、下記に示すのはその一例であり、受講生に授業を見る目が徐々につきつつあることがわかる。

□相互評価によるコメント

「物語の中に例文を入れる形式の oral introduction であることがわかった。そこで思ったことは、物語の中で先生が一方的に話をしていて、生徒との interaction が十分ではないのかということ。より授業を高めるためにはやはり生徒とコミュニケーションをとりながら授業を行うことが望ましいと思った。」

②学生 C 「受動態」：場面を 1 つに限定した例（英文は原文のまま）平成 28 年 12 月 8 日実施

T: Look at this picture. This is a national flag. What country's national flag is this, S1?

S1: It's Australian flag.

T: That's right. In Australia, what language do people speak, S2?

S2: English.

T: Yes. In Australia, people speak English. English is spoken in Australia. English is spoken in Australia. Repeat after me. English is spoken in Australia.

Ss: English is spoken in Australia.

T: OK, next. Do you know the animals of Australia, S3?

S3: Koalas (Kangaroos).

T: That's right. (If the student says "kangaroos", ask another student and say "That's right. But do you know another animals of Australia?")

(Ss: Koalas.)

(T: Yes.)

T: Many people love Koalas. Koalas are loved by many people. Koalas are loved by many people.

Repeat. Koalas are loved by many people. (以下略。その後、Sydney Opera House, Melbourne Station, the Blue Mountains を取り上げて、受動態の例をさらに 3 つ示している)

この学生の模擬授業の特徴は、「受動態」の例を多く示し、高校生の「気づき」を深めようとしている点であり、また、オーストラリアでの言語・人物・動物に絞ることにより場面がコロコロと変わらず、生徒が理解しやすいものとなっている。英語の誤りは若干見られるが、学生 B ほどではない。また、Oral introduction 後の日本語による補足説明では、受動態の機能として「物事をされる側が主体となり、話題になる。される側を目立たせることができる。」と説明し、受動態が単なる能動文の機械的な変換ではないことを示していることも評価できる。

□相互評価によるコメント

「オーストラリアの関連性を基にして、オーラルイントロダクションが形成されていき、想像しやすくなりわかりやすい授業だった。生徒に問いかける部分も多く、楽しく授業を進めることができた。」

③学生 D 「現在完了 (継続)」：referential question を活用した例（英文は原文のまま）

平成 28 年 12 月 22 日実施

T: OK, I have two questions. First, can you play the piano? Please raise your hand! S1, When did you start to play the violin?

S1: When I was _ years old, I started to play the piano.

T: Oh, really? Do you play the piano even now?

S1: Yes/No. (No の場合、他の生徒に聞いてみる)

T:OK! S1 started to play the piano when he/she was～years old. And even now he/she plays the piano. So, ①He/She has played the piano since～. (生徒の答えに合わせて～を言う)

In my case, I can play the piano. I started to play the piano when I was 5 years old. Even now I play the piano. So, ②I have played the piano since I was 5 years old. OK! Next question! Where are you from, S2?

S2:I'm from～.

T:Oh, you are from～. (岐阜、愛知の場合は、Do you live in Gifu/Aichi even now? 岐阜、愛知以外の場合は違う生徒に聞く)

S2:質問に応じて答える。

T:OK. S2 is from～. And He/She lives in～even now. So～year, he/she lives in～. So, ③He/She has lived in～for～years. And in my case, I'm from Ishikawa. When I was 18 years old, I went to Gifu to go to university. I live in Gifu. So, ④I have lived in Gifu for 2 years. OK! Let's review.

Repeat after me. (①～④をそれぞれ2回ずつ交互にリピートする)

この学生の特徴は身近なことについて問いかけ、生徒から情報を引き出し、それを利用して新出文法事項を理解できるようにしている点である。既習の英語を効果的に用い、ステップを踏んでわかりやすく導入している。また、生徒の予想される反応を1つではなく、2つ想定していることも評価できる。英語は比較的正確ではあるが、文中の大文字・小文字の使い方等いくつか間違いが見られる。このような間違いはこの学生だけに限ったことではなく、ある程度英語力がある学生の場合にも見られ、その都度指摘していく必要がある。

3. 評価方法

「英文法教育研究Ⅰ」と同様に行ったが、模擬授業についてはそれぞれの発表を「授業の基本」「授業内容」の2つの観点から評価した。「授業の基本」では6つの点について評価することとし、「声量」「生徒との eye contact」「明確な指示」「板書(計画性、チョークの使い方)」「英語 (accuracy, fluency)」「わかりやすさ」をそれぞれ5段階で評価した。「授業内容」では、具体的に良い点・改善すべき点を記述した。また、「英文法教育研究Ⅰ」と同様に、各模擬授業の良い点・改善すべき点(英語の誤りも含む)についてクラス全体にコメントした。

IV. 成果と課題

昨年度1年間と今年度前期の実践による成果と課題は次のとおりである。授業開始当初は、日本語での明示的な文法説明をまるごと英語に訳して説明することを求められていると勘違いする学生がいたが、次第にそのような発表は見られなくなった。また、発表原稿を事前に詳細に記させたので、3年次に選択履修する「中等教科教育法Ⅲ(英語)」で必要な細案を書く準備練習にもなった。「英文法教育研究Ⅰ・Ⅱ」の主目的は、英文法に関する指導技術を習得させることであるが、その過程で各学生が自分の英語力(特に発音等の音声、文法・語法、語彙)を振り返り、不足する点を認識することもできたと考えられる。しかしながら、受動態を単に能動態からの機械的変換として説明したり、関係代名詞の非制限用法を用いるべき場面で制限用法を使うなど、個々の文法事項に関する正確な理解が不足している場合があった。どのようにして一層正確な英文法の理解をさせていくかが今後の課題である。

また、今回の中学校学習指導要領の改訂により、中学・高等学校の両方において「英語で授業を行うこと」が「基本」⁸⁾となり、教職希望者にはかなりの英語力が求められるようになった(文部科学省は中高英語教員の「英語力については、英検準1級以上、TOEIC730点程度以上」を求めている。⁹⁾) 実際、授業で中高生が予想に反する応答をし、指導案通りに授業が展開しないことも考えられる。そのような場面に遭遇しても、臨機応変に対応できるだけの英語力を育成していく必要がある。

V. おわりに

「英文法教育研究Ⅰ・Ⅱ」では、文法事項の導入方法に焦点を当てて行ってきたが、教室での文法に関する活動には、その他に「口慣らしをさせる」ドリル活動、文法事項を用いたコミュニケーション

活動もある¹⁰⁾。中高の学習指導要領では、文法についての知識習得が文法指導の目的ではなく、「コミュニケーションを支えるもの」として「実際に活用できるように指導」することが大切だとしているので、ドリル活動・コミュニケーション活動中心の模擬授業を行っている「中等教科教育法Ⅲ(英語)」の必履修が望ましい。また、読むことに焦点を当てた模擬授業を行う「中等教科教育法Ⅳ(英語)」も履修すると、実際に教える経験が大幅に増え、指導技術のかなりの部分を習得できると考えられる。中等教育における英語科教員の育成に必要な資質を再点検し、コア・カリキュラムを参照しながら、本学外国語学部教職課程における科目編成が必要である。

注・文献

- 1) 文部科学省 (2008) : 中学校学習指導要領第 2 章第 9 節外国語
- 2) 文部科学省 (1998) : 中学校学習指導要領第 2 章第 9 節外国語
- 3) 文部科学省 (2008) : 「中学校学習指導要領解説 外国語編」開隆堂, 東京, 45
- 4) 田中武夫・田中知聡明 (2014) : 「英語教師のための文法指導デザイン」大修館書店, 東京, 74-82.
- 5) 三浦 孝・内田 恵・矢野 淳 (2010) : 「確かな力を育てる英語授業ハンドブック」静岡大学教育学部英語教育講座, 静岡, 12-18.
ここで示されている「オーラル・イントロダクションの仕方」を参考にして作成した。
- 6) 文部科学省 (2017) : 中学校学習指導要領第 2 章第 9 節外国語
「3 指導計画の作成と内容の取り扱い」には「(1)エ 生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒に理解に応じた英語を用いるようにすること。」と記されている。
- 7) 財団法人 語学教育研究所(1988) : 「英語指導技術再検討」大修館書店, 東京, 4-7.
Oral introduction への批判を取り上げ、「教師の一方的な語り」の問題点を記している。
- 8) 文部科学省 (2010) : 高等学校学習指導要領第 2 章第 8 節外国語
文部科学省 (2017) : 中学校学習指導要領第 2 章第 9 節外国語
高校では平成 21 年の改訂、中学では平成 29 年の改訂により「授業は英語で行うことを基本とする」となった。
- 9) 英語教育編集部 (2017) : 英語教育ニュース, 英語教育, 66 (7), 72.
- 10) 本田敏幸(2011) : 「若手英語教師のためのよい授業をつくる 30 章」教育出版, 東京, 58-68.

